亀岡盆地の保津川と遊水池の今

丹羽 英之*・阿野 晃秀**

京都先端科学大学バイオ環境学部 〒621-8555 京都府亀岡市曾我部町南条大谷 1-1

Serial Publication: For Understanding Landscape (4)

The Hozu river and anti-flood pond in Kameoka basin

Hideyuki Niwa* and Akihito Anô**

Kyoto University of Advanced Science Faculty of Bioenvironmental Science, 1-1 Sogabe-cho Nanjo Otani,
Kameoka City, Kyoto 621-8555, Japan

キーワード: 盆地, 遊水池, アユモドキ, 京都スタジアム, グリーンインフラ

はじめに (丹羽英之)

日本景観生態学会第29回京都大会公開シンポジウムは「亀岡盆地の保津川と遊水池の今」と題し、亀岡盆地を流下する保津川と遊水池の現状について議論した。原田禎夫氏（大阪商業大学）から「清らかな流れを次の世代へ～プロジェクト保津川の取り組み～経済的な観点」、豊田知八氏（保津川遊船企業組合代表理事）から「保津川舟下りの文化的景観の意義とその魅力」の基調講演を受け、パネルディスカッ

ションでは、亀岡の氾濫原、亀岡スタジアム、文化的景観、アユモドキをキーワードに、景観生態学らしく生態学だけではなく、文化や経済的な観点を含めた多様な議論が展開された。シンポジウムを受け、翌日のエクスカージョンでは、保津川の遊水池利用と文化的景観と題し、亀岡盆地を巡った（図1）。保津川沿いの伝統的な集落では、川の恵みや脅威と向き合い、自然と折り合うなかで育まれてきた文化的景観がみられる。大きく蛇行しながら流れる保津川周辺には多様な水辺空間がみられ、ワンドの存在や

出展：地理院タイル

図1. 亀岡盆地および主要な訪問先の位置

* 連絡先: niwa.hideyuki@kuas.ac.jp

** 連絡先: ano.akihito@kuas.ac.jp

受付: 2019年12月25日 / 受理: 2020年3月25日

水田とのつながる湿地環境が確保されてきた。このような遊水池は淡水魚の生息地となり、アユモドキ、イチモンジタナゴなどの多様な魚類が確認されている。一方、長年にわたり大雨のあとの水害に悩まされており、治水安全度を高めていくことが強く求められている。今日、地域の生活や生業は大きく変化し、また治水事業や都市化が進んでいる。保津川の遊水池や文化的景観がどのような未来に向かっていくのか、現地を歩きながら参加者と一緒に考えた。本稿ではエクスカージョンの概要を紹介する。

京都・亀岡保津公園（阿野晃秀）

2019年6月2日10時にJR亀岡駅に集合した。北側のテラスにて、現在工事が進む駅北開発について並河悦郎氏（亀岡市役所）から説明を受けた（図2）。駅の北側には、古くから地域のシンボルであった丹波富士「牛松山」が保津川の向こうにそびえていた。駅北広場の整備においても、山を臨む景観を確保するために東西に70mの幅を持たせているようだ。

図2. 亀岡駅北側テラスから風景 正面が牛松山、右手は建設中の京都スタジアム

アユモドキの生息・産卵地である曾我谷川と保津川の合流地点に位置する亀岡商工会館の屋上にて、並河悦郎氏（亀岡市）、豊田知八氏（保津川遊船企業組合代表理事）、黒川孝宏氏（前亀岡市文化資料館館長）からスタジアム建設の経緯や当該地におけるアユモドキの保全状況に関する説明を受けた（図3）。

京都・亀岡保津公園は、元々は京都スタジアムの建設予定地を含む都市計画公園であり、アユモドキへの影響が危惧されたために京都スタジアムの建設場所が現在の駅北の土地区画整理事業地に移ったことで公園としての役割のみが残った。複数の地域住民が参加するワークショップを経て、公園のデザインも現在かたまりつつある。当該地は霞堤の切れ目に位置し、氾濫時の遊水池としても機能してきた。これらを踏まえ、「昭和30年頃の亀岡の原風景」をコンセプトに、農的な営みを最大限に残した公園としての利用が模索されている。

亀岡商工会館の屋上から北側の牛松山へ目を向けると、眼下には川のダイナミズムを感じられる景観が広がっていた。手前には保津川下りの舟が待機する波止場があるのだが、洪水の度に全くの更地となるようだ（図4）。見学中にも、波止場を整形する工事が現在進行形で行われていた。

亀岡商工会館の足元に降り、アユモドキの産卵に欠かせない一時的水域を人工的に作り出してきた農業用のラバーダムを見学した（図5）。そのすぐ下流にあるテトラポットの隙間ではアユモドキの生息が確認されている。次に上流側に回り、ダムの起動後に浸水する産卵場所である中州や水田を活用した作られたアユモドキの産卵実験場を見学した（図6）。ラバーダム起動時には、下流側に取り残されたアユモドキを捕獲し、上流側に放して産卵を促す「アユ

図3. 亀岡市商工会議所の屋上から西側の風景

モドキ救出作戦」が行われている（NPO，地元住民，亀岡市役所職員，京都先端大の教員・学生が参加）。

産卵実験所の見学後，ヨシキリの警戒音に急かされながら保津川沿いを散策し，沈下橋に到着した（図7）。地元では保津小橋の愛称で親しまれるこの橋は，亀岡盆地の氾濫原を象徴する文化的景観の一つである。川との距離が近い橋上では，レクリエーションを楽しむ人々と保津川下りの乗船客とのコミュニケーションが自然と生まれていた（図8）。荒々しく手つかずに見える保津溪谷であるが，1606年の豪商・

角倉了似による保津峡開削以来，人の手によって川づくり（水運路づくり）がなされてきた。保津峡の入り口である沈下橋の付近にも十分な水深と航路を確保するための水工の様子が伺える（図8）。

最後に，橋を渡って保津川左岸にある保津集落に入り，角倉了似をまつる養源寺を拝観した（右岸には山本集落がありどちらも舟頭の村である）。その他の特筆すべき景観要素として，湧水を溜めて利用する「イケ」がある（図9）。山麓の傾斜地であることを利用し，各家々のイケは繋がっているが，沈殿槽

図4. 舟の波止場と工事中のコンボ

図5. ラバーダム（手前）と下流のアユモドキの生息地

図6. アユモドキの産卵地：曾我谷川の中州と産卵実験場

図7. 沈下橋

図8. 保津川下りと沈下橋

図9. 保津集落のイケ

を設けることで下流へ流れる汚れの量を減らすなどの配慮があり、コモンズとしての使用方法には学ぶものも多い。以上、「山・原・川」と小盆地宇宙と称される亀岡盆地の代表的な景観をめぐることができた。前日のシンポジウムでの議論が実感を持って刻まれた半日となった。

おわりに（丹羽英之）

環境省が選定した重要里地里山（生物多様性保全上重要な里地里山）500のうち1つが「亀岡盆地の氾濫原」である。重要里地里山500の3つの選定基準である「多様で優れた二次的自然環境を有する」「里地里山に特有で多様な野生動植物が生息・生育する」「生態系ネットワークの形成に寄与する」を「亀岡盆地の氾濫原」は有していると評価されたことになる。具体的には、亀岡盆地はアユモドキだけではなく、氷期の冷涼・乾燥期、間氷期の海進期において大阪平野の魚類の退避場所となったことで、今日も豊かな魚類相がみられる。また、アユモドキ生息地における可動堰立ち上げ時のアユモドキの保護や外来魚駆除、密漁防止パトロールなどのアユモドキ保全活動は、長年、地域住民との協働で進められており、豊かな自然環境を地域で守っていく体制が形成されている。さらに、京都・亀岡保津公園だけではなく周辺地域も含めた「保津川かわまちづくり全体計画」や「亀岡まるごとガーデン・ミュージアム構想」が策定されており、「亀岡盆地の氾濫原」を1つの景観として捉え、そのあり方や保全方策を検討する土俵が既に整っている。未曾有の河川氾濫をもたらした2019年の台風19号により遊水池の重要性が再評価されている。霞堤の近くに位置する京都・亀岡保津公園は浸水履歴が多く、遊水池として機能してきた。そのため、京都・亀岡保津公園には遊水池としての機能をもたせることが検討されているようだが、河川整備においては亀岡盆地に11カ所ある霞堤はかさ上げする計画が進められている。「亀岡盆地の氾濫原」は、グリーンインフラの先進地となるポテンシャルを大いに秘めた地であり、多角的な議論を継続し賢明な判断により「亀岡盆地の氾濫原」の景観を次世代に継承していくべきである。